
災害時の妊産婦支援の課題と提案

(渡邊直子ほか、日本集団災害医学会誌 22: 255-266, 2017)

2018年2月23日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

災害時の妊産婦の取り扱いについては一定の見解が得られていない。妊産婦に異常は認めず自覚症状がなくても、胎児心拍の異常や破水といった胎児生命に関わる問題に陥っていることがあるため、健康な妊産婦であっても胎児あるいはその環境に異常がないかの評価が必要である。しかし、災害医療に関わるスタッフの中に産科医数は非常に少ないため、災害現場にいる妊産婦に広く産科評価を実施するためには、産科専門外であっても災害医療従事者・支援者に妊産婦に関わってもらう必要が生じる。そこで今回は簡素化し容易に実施できる産科評価の方法と対応につき提案する。妊産婦の救護は他の救護者と基本は同じであるがいくつか注意点が存在する。

妊産婦に対するトリアージの問題点は、歩行可能で緑タグに分類され生理学的に問題がないとされた妊産婦や、黄タグでも生理解剖学的に問題ないとされた妊産婦の、胎児の状態や分娩開始の徴候について評価が実施されないところにある。

妊産婦の産科評価をするためにはまず妊産婦を認識することから始まるが、START法のトリアージには妊娠の有無を確認する項目はなく、ここに妊娠可能な年齢女性すべてに妊娠の有無を確認する項目をいれることは難しい。また、被災者に対して医療従事者は少ないため、妊娠可能な年齢の女性一人ひとりに妊娠の有無を確認することは困難な可能性が高い。そこで提案されるのが緑・黄エリアにて呼びかけで名乗り出てもらい、妊婦対応問診票を記載してもらおう方法をとれば、少人

数の医療スタッフでも短時間で詳細な産科的な情報を得ることができる。また、このように妊産婦の記録を残すことは、個人情報の問題もあるが、このあとに続く亜急性期、慢性期の妊産婦の支援にも役立つ。

また医療機材がない状況下での簡便な評価方法として問診票の他に①腹痛の有無、②性器出血の有無、③破水感の有無、④胎動が減少していないかを中心に質問することを提案する。上記4つの質問で問題があった場合は産科医療機関の受診を勧める。

日本赤十字社救護班が妊産婦の救護支援を急性期から慢性期に至るまで絶え間なく円滑に行えるように産科救護のモデルを考案している。このモデルは、助産師が産科している救護班が通常の医療活動とともに妊産婦の産科評価を施行しその対応にあたり、さらに、産科医がアドバイザーとして必要に応じて相談にのるというシステムになっている。このモデルが確立すれば災害時に救護に参加できる産科医が少数であっても効率的に妊産婦の対応が可能となる。このモデルで産科医療従事者が求められているものは、①被災地、またその近傍の医療施設で救急患者を受け入れ、そこで足りない人材・医療資源を補充する、②被災地近隣の病院を強化しそこで妊産婦の診察を行えるようにする、③被災地外に避難する妊産婦の受け入れ病院を容易に探せるシステムを作る、④被災地で救護活動をしている災害医療関係者に適切なアドバイスを行う、⑤亜急性期・慢性期の産科に特化した対策をコーディネーターと相談する、などが挙げられる。

災害時に妊産婦に生理学的異常を認め、早急に医療介入しなければならない状況は2つにわけられて、①妊産婦が一般的な疾病や外傷にあった場合と、②産科特有の疾病に罹患した場合である。

①の場合、非妊産婦と同様に生命維持のための生理機能に基づいた ABCDE アプローチを最優先

しする。妊産婦の注意すべき特徴として仰臥位にすると大きな支給が背側を走行する下大静脈を圧排し静脈還流量を減少させ、血圧が下降し血液循環を悪化させる。よって左 15~30 度に傾けるか、側臥位にする。どうしても仰臥位を取る場合には用手的に支給を左側に移動させる必要が有る。②のときが疑われるようなときも、まずは生命維持のための生理機能に基づいた ABCDE アプローチが最優先である。ただし、大きな違いは全ての疾患において、医療機器のない医療施設外では安定化を図ることは難しく、母体・胎児とも状態は悪化し続ける。このため可能な限り優先順位をあげて産科医療機関に搬送することが必要である。

分娩が切迫した妊産婦の取り扱いについて、予期せぬ分娩は新生児を低体温にし、低体温は簡単に新生児の生命の危機にたたせる。また、施設外の分娩での母体の異常では胎盤娩出後の弛緩出血が最も多いので、積極的に胎盤を娩出させる必要はない。

亜急性期・慢性期の妊産婦は不規則な生活やストレス、塩分の高い食事などにより妊娠高血圧症候群の罹患率があがることが指摘されている。

妊産婦や乳幼児は、災害時は被災地外に一時的にも避難するべきで、被災した場合を想定して母児ともに安心して避難できる場所を考えてもらうことが大切である。